「たくましい人間」育てる

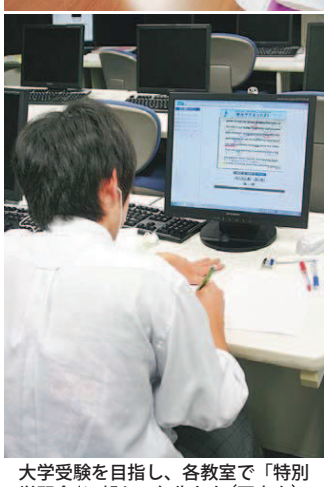
小・中学校、高校を擁す駿台甲府学園（甲府市塩部２丁目、山﨑善久理事長）は、「愛情教育」を建学の精神に、「納得受験」「納得人生」を後押しする。母体となる駿台予備学校（本部・東京）と連携し、さまざまなカリキュラムや学習支援体制を整え、児童・生徒の学ぶ意欲とチャレンジング・スピリットを育んでいる。さらに、心豊かな人間性の育成にも力を注ぎ、知徳体を兼ね備えた、たくましい人間教育に力を注いでいる。

充実の学習環境を整備 納得の大学受験後押し

―駿 高―

放課後、肌寒さが増す外気とは対照的に、教室で机に向かう生徒たちの熱気が高まる。駿台甲府高（酒井徹哉校長）3年生による、恒例の「特別学習会」が始まった。

教室は授業や講習ではなく、参考書などを開いて自ら学ぶ、自学自習の場となる。大学受験を控えた生徒たちは机を並べ、同じ空間を共有しながら合格を目指して切磋琢磨し、推薦入学が決まっている生徒たちは別室で、自らの学力の維持・向上に努める。



大学受験を目指し、各教室で「特別学習会」に望む３年生たち（写真上）。職員室でアドバイスを受ける生徒（同中）。オンデマンドを使い、弱点克服に努める生徒も（同下）
＝いずれも駿高塩部キャンパス

「受験は、個々が輝くための団体戦」と話す酒井校長。「学習会の目的は、規則正しい生活をしてもらうことです。しかし、それ以上に、一緒に頑張る仲間の姿に刺激を受け、一層の努力につながることと、落ち込んで弱気になったときには励まし合い、仲間から元気をもらうという効果が期待できます」と説明する。

予備学校と連携

駿高が大切にしているのが、生徒たちが夢をあきらめないで納得受験に臨める学習環境づくりだ。母体となる駿台予備学校は、創立95年の歴史を持ち、難関大学を目指す全国の有名進学高の生徒が通う、いわば大学合格をアシストする受験指導のプロ集団だ。

「特別学習」に臨む教室の明かりが夕闇に浮かび上がる

「授業が真ん中」をモットーに充実した教師陣をそろえ、日々の授業を大切にしているのはもちろん、駿台グループの強みを生かし、同予備学校と連携。その学習環境に、在校生や志望校入学を果たした卒業生たちは心強さを感じている。

駿高にいながらにして、同予備学校の実力派講師による講義を受講できるサテネット21（通信衛星授業）のオンデマンド方式を導入しているのも大きな強みだ。国立大医学部を目指す3年女子（昭和町）は「2年生の後半から活用しています。弱点を集中的に学べるのが魅力です。同じ教室で頑張る仲間がいることもいい刺激になっています」と話す。

さらに、実力派講師陣が駿高に赴いて開く講習会や、東京大などの難関大学、医・歯・薬学部を目指す生徒を対象にした各セミナーも開催。東京の同予備学校で開かれる講習会参加者には、交通費の補助を出すなど学ぶ意欲を後押しする。

一方で、今年は中高教師陣のレベルアップを目指し、同予備学校主任講師との教科研究会も開催。さらなる学習環境の充実に余念がない。

駿高で特別授業も

学習塾には通わず、駿高の学習環境を有効活用している3年女子（甲府市）は「学校の先生方による授業後の講習会も充実していて、積極的に受講しています。先生から紹介してもらった長文の本で英語にも自信がつきました」と意を強くする。東京の予備学校の講習会にも参加し、「全国から難関校を目指す高校生が集まってきて、いい刺激になりました。交通費を補助してもらえるのも助かっています」と話す。

10月の東京国体出場後に陸上部を引退し、現在は、陸上を続けられる国立大学への進学を目指す3年男子（南アルプス市）は、駿高が掲げる「文武共存」を身をもって実践。現在も成績を伸ばしていて、「陸上も頑張るけど、勉強もしっかりやりたいという信念がありました。これを先生方も応援してくれています。勉強で分からないことがあれば相談でき、教科書のほかに予備学校の教材も使えるので、充実した環境に感謝しています」と進路実現へ努力を続ける。

今年は、同予備学校主催の「東大実戦模試」の解説と対策を目的にした特別授業も駿高で初開催。東大理科1類を目指す3年男子（甲府市）は「模試を作成した講師が来校し、レベル設定や設問の背景を教えてもらえ、今後の受験対策に大いに役立ちました」と話す。

また同男子は、「チャレンジング・スピリット」という教育方針に魅力を感じ、中学から駿台を選んだという。「僕自身、高校では二つの部活と一つの同好会を掛け持ちしていますが、勉強だけでなく、さまざまなことに挑戦できる環境は、学校生活をより豊かなものにしてくれています」とメリハリある生活を楽しむ。

「愛情教育」のもと、細やかな配慮が行き届いた環境で、新たなステージアップを目指した生徒たちの挑戦が続く。

「死」見つめ生き方考える 小児がん女児に学ぶ

―駿 中―

駿台甲府中（河﨑哲郎校長）のテーマは「自立への滑走路～未来の自分づくり」。中高一貫教育のメリットを生かし、確かな学力の確保はもちろん、豊かな人間性や挑戦する心の育成にも力を注ぐ。広島への修学旅行を控えた2年生を対象に、力を注いでいるのが平和教育と命の大切さだ。

10月上旬には、18年前に小学1年生だった6歳の長女を小児がんで亡くし、その後、NPO法人「いのちをバトンタッチする会」を立ち上げた鈴木中人さん（愛知県）を講師に招き、「いのちの授業」を開催。命について考えた。

「いのちの授業」に聞き入る生徒たち
＝いずれも駿中

講演後、鈴木中人さんからマイクを向けられ、感想を語る女子生徒

「これから小学生の女の子が死んでいく話をします」。鈴木さんの言葉に、場内は静まり返った。長女・景子さんのおなかにがんが見つかったのは3歳の時。「神経芽細胞腫」だった。助かる確率はわずか15％。それでも治ると信じて腫瘍切除手術に臨み、抗がん剤治療に望みを託した。

自殺者は約3万人

スクリーンには、狭い病室で点滴の管につながれた景子さんが映し出された。やがて抗がん剤の影響で柔らかな髪は抜け落ち、顔はむくみ、やがて目の周りには色素沈着もみてとれた。

「わたし、てんごくへいっちゃうの？」。不安がる景子さんに治療の理由を伝えると、あれほど暴れた注射も、「わたし、がんばったから」と、涙をボロボロと流しながら耐えた。たくさんの人の協力で輸血できると聞けば、景子さんは自らの体につながれた血液パックに向かい「ありがとうございます」と頭を下げ、一時退院できたときには、公園で遊んだ友達との別れ際、「ありがとう」と感謝したという。

小学校入学を前に脳に転移が見つかり、命の期限を切られた後も、元気な時と変わらずに接してくれる友達や先生に恵まれ、幼稚園へ、そして小学校へ通える喜びを力に変えて、懸命に生きた。

鈴木さんの話に自らの生き方を見つめ直す生徒や、祖父母を亡くした自らの経験と重ね合わせて涙した生徒もいた。

国内において、小児がんで亡くなる子どもは年間約2万人。自殺者はこれを上回る約3万人に上ることも紹介されると、小学6年生の時に友達を病で亡くしたという坂本大治朗さんは「『子どもが親より早く死ぬと、親は血の涙を流す』という話が、友達のお母さんの姿と重なりました。生きたくても生きられない人がいることを考えると、自殺は絶対にいけないことだと感じました」と感想を話した。

精いっぱい生きる

小畑文佳さんは「短かったけど精いっぱい生きた景子ちゃんの死が鈴木さんのこの活動につながり、これまでにこの講演を聴いて自殺を思いとどまった人もいたはず。景子ちゃんは間接的に多くの命を救ったのです。大切なことは、人生にどんなことを残せたか。努力してもどうにもならないこともあるけど、私も精いっぱい生きなければいけないと思いました」と振り返った。

2年生の平和や命を考える取り組みは、毎週木曜日の放課後に各学年が行っている課題研究の時間にまで及ぶ。広島に関する調査研究の発表会も順次行っていて、原爆の悲惨さ、命の尊さ、家族との絆などについて調べている生徒も少なくないという。

河﨑校長は「多感な思春期はさまざまなことを考え、悩む時期。家族との接し方にも変化が見え始めます。これまでもさまざまな平和教育を実施してきましたが、原爆が投下された広島への修学旅行を前に、命に向き合い、家族や友達との関係を再認識する機会になれば、と考えています」と期待している。

小瀬で駿小運動会 練習重ね本番で開花 活動通し思いやりも

小瀬に響く、児童たちの歓声―。駿台甲府小（石川博校長）は19日、甲府・小瀬補助競技場で大運動会を行い、1～6年生が赤、青、黄、白色の縦割り4グループに分かれ、23種目に心地よい汗を流した。

台風26号の影響で、朝まで雨が降り続いたものの、運動会が始まるころには上がり、児童たちが待ち望んだ運動会日和となった。運動会のテーマは「いざ出陣！ 勝利のために汗をかけ」で、全校児童のアンケートを総合してつくったという。児童会長の遠藤弥宙さん（6年）は「一生懸命に声を出し、汗を流して勝利を目指し頑張ろうという思いを表しました。ムカデ競争など、最初の練習のころはすぐに転んでしまったけど、休み時間も使って練習を重ねた結果、本番ではどこも一致団結して最高のチームワークを発揮できました」と満面の笑みを見せた。

優勝したのは、バーを4人で持ってリレーする4色対抗の「台風の目」などを制した青組。一方で、今年は各学期に4色対抗戦を設けていて、総合優勝の行方は3学期の球技会が終わってから。遠藤さんは「1学期のゲームでは黄が勝ち、運動会は青が優勝したけど、総合優勝の行方はまだ分かりません。球技大会が終わるまで、わくわくは続いています」と声を弾ませる。

石川校長は「きょうだいの数が少ない環境だからこそ、縦割り活動を通して、いたわる心や優しい気持ち、助け合いなど多くのことを肌で感じてほしいと思います。運動会では、担当係ではない児童が状況を見て、困っている人を手伝うなど自主性も生まれていました。運動を通して体力を付けるとともに、人間性を育む大切な時期に多くのことを学んでほしいと考えています」と話していた。

全力で頑張った駿小運動会。児童たちの表情が輝く
＝甲府・小瀬補助競技場

〈企画・制作〉山梨日日新聞社広告局